# 青いチビの使い魔

だしィー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青いチビの使い魔

【Ｎコード】
Ｎ１８１５Ｗ

【作者名】
だしィー

【あらすじ】
こんにちは、音深之珠鬼奇（おとみのたまきき）です。
転生者です。そして妖怪です。なんか、召喚されたらしいのでがんばります。

## 主人公設定（前書き）

適当なので気をつけて

## 主人公設定

音深之珠　鬼奇（おとみのたま　きき）

年齢２０　　ぬらりひょんと鬼のハーフ

外見　ネギま！のナギ・スプリングフィールド。髪の色は黒

能力
ぬらりひょんの孫から、ぬらりひょんの畏（おそれ）
青の祓魔師から、魔王（サタン）の炎
シャーマンキングの陰陽術

性格
一応は真面目ただ相当な面倒くさがりで、好きな事には労力は惜しまないが
関心がない物にはとことんルーズになる。対話・会話が少々苦手。

概要
大学のサークル仲間と山に虫取りに行ったときにハブに噛まれて死亡
死後なんやかんやで超常的な何かから能力貰って転生する。
転生先は夜桜四重奏の世界。原作介入をめざして色々努力していたが
原作開始の３０年前だった事に気づいた時、一気にダメ人間になった。
バイト帰り目の前に鏡のような物が現れ、
避けられずスクーターで突っ込んだら異世界に召喚されてた。

## 主人公設定（後書き）

気分転換で書くので更新はとても遅くなります。さらに内容もテキトーに
なりますのでご了承を。

## 召喚とかされたらしい（前書き）

すごく更新が遅くなると思います。

## 召喚とかされたらしい

タバサＳｉｄｅ

ブロロロロロロ！！
そんな音と共にソレは現れた。私はとっさに身をひるがえし突っ込んでくる赤い色をしたソレをかわすとすぐさまソレに対して杖を構え警戒する。一体何が出てきたのだろう？先ほど出てきたソレをよく見てみると。

「な、なんだ！」

しゃべった。いや、違うあの変な音を出している物の上に乗っている見た事の無い妙な服を着た人が声を出したのだろう。と、言う事はまさか私は人間を召喚してしまったのだろうか？

「おいおい、何だコイツ。」「くくく、おいコイツマント付けてないぞ。」「と言うことは平民か？」「あはははは、？あの？ミス・タバサが平民を召喚したぞ！」「マジかよｗｗｗｗｗ」

「あ〝ぁ！？なんだお前等？」

周りのクラスメート達が私と召喚した青年を馬鹿にするような事言うがそんな事はどうでもいい。とりあえず私は召喚した青年に近づき彼をよく見る。

「？、なんだよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

私が何も反応を返さないと彼も私と同じように無言でこちらを見てくる。

「あー、ゴホンッ。ミス・タバサ儀式の続きをよろしいかな。」

コクッ

動かなくなった私達に痺れを切らしたミスタ・コルベールが儀式の続きを促してきた。確かにこのまま見合っててもしかたがない。

「・・・降りて。」

「へぁ？」

「ソレから降りて。」

「？・・・コレでいいか？」

彼を乗っていた物から降ろしたが？アレ？をするのに彼の頭に届かない。

「しゃがんで。」

「ん～やだ」

鬼奇Ｓｉｄｅ

ん～、あー、やっと思い出した。ゼロ魔だねここ。なんつーか、微妙だな～嬉しいっちゃ嬉しいけど、めんどくさい世界でもあるからなぁ、特にピンクと青は厄介事の塊だし。そして俺はその青い方に引き当てられたっと、つい反射で断ったけど俺タバサ好きだから本当は全然ＯＫなんだよなぁ。さて、どうゆう言い訳しようかな？

「・・・しゃがんで」

もう一回いってきたよ。よし、ここはかっこつけて・・・・・やめた、なんかめんどい、ゆうこと聞いて流れに任せよう。

「はぁ、こうか？」

俺は青チビことタバサの言うとうりにしゃがんだ。まぁ何されるか知ってるけどね。タバサはしゃがんだ俺に近づいてそして、

「・・・ん。」

「・・・・」

唇を重ね合わせた。余談だけど俺、ファーストキスじゃないから。俺がいた世界でもう済ましてるし、あの頃はがんばってたなぁ～。って肩熱っ！！！

「痛っ！！」

「大丈夫、ルーンが・・・」

ガシッ

「お前も痛みを味わえ！」

俺は何か喋り始めたタバサの頭を鷲掴みし締め上げる。

「・・・！！・・・！・・・」

とりあえず痛みが引くまで・・・

「・・・エア・・・・ハンマー」

ゴォォ！！

「うげぇ！！」

締め付けて様と思ったら吹っ飛ばされた。くぅぅ、腹痛ぇ。

タバサＳｉｄｅ

私は『コントラクト・サーヴァント』を彼と行い、肩にルーンが刻まれてる事を確認し痛がっている彼にその事を教えようとしたらいきなり私の頭を片手で掴みそのままものすごい力で締め上げてきた。私はとっさに痛みの中え『エアハンマー』を唱え彼にぶつけて吹き飛ばした。それなりに力を込めたので意識は無いだろうと思っていたが

「何しやがるチビ。」

すぐに起き上がって文句を言ってきた。まさか近距離でしかもそれなりに力を込めたエアハンマーを食らって起き上がるとは思わなかった。

「おーい、聞いてるか？」

彼はまるで何事も無かったように私に声を掛けてくる。もしかしたら私はとんでもないものを召喚したのかもしれない。それを確かめたく私は杖を彼に向けて構えをとる。しかし、

「ミス・タバサ、お取り込み中申し訳ないが今は授業中だそうゆうことは後でお願いできるだろうか。」

ミスタ・コルベールに止められた、周りも私達に注目しており私は構えを解いて彼を連れてこの場を離れる。そういえば彼が乗っていた赤い物は何なのだろうか？今は変な音もせず彼が移動させている。後で聞いてみよう。

「・・・・・どこ行くんだ？チビ助」

「タバサ」

「へぇ？」

「私の名前」

「タバサね、俺は音深之珠鬼奇（おとみのたまききき）、鬼奇と呼んでくれればいい。」

「わかった。」

オトミノタマキキ、とても変な名前だ、それにやはり彼の着ている服もとても珍しいものだ私は行った事はないが闇市で東方からの服に似たようなものがあるのを聞いた事がある。ということは彼は東方の人間となる。もしかしたら彼は私の希望となるかもしれない。

ジルSide

クソッ！どういうことだ！なぜ、タバサちゃんの使い魔がシルフィードじゃないんだ！！これじゃあ俺のハーレムを作れない。何とかしてあの邪魔者をどうにかしないとって言っても俺には神様から貰ったチート能力があるからあんな顔だけのヤツどうにでもできるし、もしあいつが何かしらの能力持ってたとしても俺に勝てるわけ無いしな、ウヒヒヒ・・・。

## 召喚とかされたらしい（後書き）

とりあえず主人公は地味に無双キャラです。あとこれは気分転換で書くので矛盾やテキトーな描写がたくさん出てきます。それでも読んでくれれば幸いです

## 話し合い的な事をした（前書き）

テキトー過ぎる、そしてグダグダ無駄に長い

## 話し合い的な事をした

タバサＳｉｄｅ

「あなたは何者？」

「妖怪」

私は彼を広場から離れた人目の付かない所まで連れてきて何者かを聞いたらヨウカイと言ってきた。ヨウカイとは一体なんだろうか？東方でのなにかしらの役職だろうか。

「それはどうゆう意味？」

「ん～、そうだな。簡単に言えば、種族か？」

種族・・・・つまり亜人のようなものだろうか。しかし彼は人間にしか見えない。

「あなたは本当に亜人なの？」

「亜人・・・まぁ人間ではないからそれであってるかな。」

彼は外見は私達と同じだけど亜人であるらしい。そういえばヨウカイとはどんな亜人なのだろう。

「ヨウカイとは一体どんな亜人なの？」

「ああ、ソレは違う。俺が住んでた場所では亜人の事を妖怪と呼ぶ

んだ。」

東方ではコチラと亜人の呼称が違うらしい、たしかに地域が違うだけで物の名が変わるなんてよくあるのだからコチラと東方で違うのはあたりまえか。

「まぁ、お前の言いたい事は理解したから、俺はぬらりひょんって言う妖怪と鬼と言われる妖怪のハーフだ、っても分かんないよな。」

ヌラリヒョンとオニ。一体どのような亜人なのだろう、しかし私は彼が亜人どうしのハーフと言うのが気になる。

「貴方の住んでいたところは沢山の種類の亜人が住んでいるの？」

「そうだな、俺が住んでた町は人間と色々な妖怪が一緒に住んでるんだ。俺のようなハーフなんて珍しくないぞ。」

私は驚いた、私達の住んでいるここでは、亜人と共生なんて基本考えないからだ。しかも1つの種類だけの亜人とならまだしも複数種類の亜人との共生と聞いたらなお更だ。

「貴方は「なぁ、」・・・なに？」

「次は俺が質問していいか？」

そういえばさっきから私ばかり質問していて彼はソレに答えるばかりだ。

「わかった。」

「それじゃ、ここは何処だ？」

鬼奇Ｓｉｄｅ

俺はとりあえず念のために此処の名を聞いた。

「此処はトリステイン魔法学院。」

「国の名前は？」

「？・・・トリステイン。」

「ふーん」

俺は此処の名前を聞いた後、空を見上げて月を見る。なるはど月は二つあるな。さて、使い魔のルーンについて確認しておくか。とりあえず警戒されないように言葉を選んで、

「俺の肩に付いた物はなんだ？」

「使い魔のルーン」

「それはなんだ？」

俺はタバサに対して上手い具合に質問して行き一番聞きたかった事を聞く。

「へぇ～、じゃあ俺の見てるものが見えたり、聞いた事が聞こえるのか？」

「意識すれば。」

はぁ～、厄介だな。

「消す事は出来ないのか？」

「無理、それが消えるのは私か貴方のどっちかが死んだ時。」

とりあえず予想通りだな。・・・・・力を使って消すなり制限を付けるなり出来るか後で試してみよう。

それじゃあ聞きたい事は聞いたし、ちょっと試してみるか。

「んじゃ最後の質問、お前の本名は？」

「！？っ・・・何故？」

ふむ、動揺してる・・・・のか？よく分からんがまぁいいや。

「そうゆうの俺は分かるんだよ。」

正確には俺の能力でタバサの心を少々覗いたんだけど、そういえばこの子の本名シャルロットだったな。

「で、名前は？」

「・・・・・それは言えない。」

「へぇ、俺はお前の使い魔なんだろ？どうして。」

「私は貴方の事まだ信用してない。」

あらあら厳しいねぇ、よくＳＳだとすぐに色々話し出すけど現実はそう簡単じゃないってことか。

「ふーん、なら信用してもらえるように俺も少し秘密を明かそうかな？」

「？・・・秘密って」

「まぁたいした事じゃないが、俺はある特別な力を使ってルーンを消せるってことぐらいだしな。」

まだ試してないけど大丈夫だろ。

「他には、人の心を限定的だか覗けたり後はなんか色々できたりするぞ、シャルロットちゃん。」

シャーマンキングの能力って便利だよな。

「！？っ・・・私の心を覗いたの？」

「信用できないって言うのは俺も一緒でな。こんな見た事も聞いた事も無い場所に誘拐まがいの方法で連れてこられたらなお更だ。」

「・・・・・他には何を見たの。」

「そうだな、お前がガリアって国の元お姫様って事、国の暗部組織

で働いている事ぐらいだ。」

「・・・そう。」

原作知識で他にも色々知ってるが言う必要は無いな。

タバサＳｉｄｅ

驚いたどころの話しでは無かった。彼が東方の亜人だから私が知らない知識や先住魔法を使う可能性を考えていなかった訳ではないが、なんの詠唱も無く特別な動作も無しに人の心を覗く魔法を使っていたのもそうだし、本来消す事の出来ない使い魔のルーンを消す事が出来る事いい私は本当にとんでもない物を召喚したみたいだ。

「貴方は、心を蝕む病をどうにかできるの？」

私は無意識のうちにそう話し出していた。

「あー、そうだな。ソレが自然的な物じゃない、つまりは他者による術・・・こっちでは魔法か、であれば症状を見てないから絶対とは言えないが治せるぞ。」

「！っ・・・・治・・・せる・・の？」

自分の声が震えてるのが分かる。長年、母の心を取り戻すために様々な文献や本を読み、珍しい薬や万能薬が有ると聞けば手に入れては母に飲ませても無理だった病を彼は絶対ではないけど治せると言った。

「ほ、本当に・・・本当に治せるの！」

私は知らず知らずのうちに声が大きくなっていた。彼は私の態度に驚いていたが苦笑いで

「まぁ、試してみればいい、治せなかったとしても症状を軽くする事は出来るはずだ。」

そう言ってくれた。私はその言葉を聞いた瞬間、座り込んでしまった。やっと、やっと母を救える、長い悪夢から起こして上げられる。そう思ったら足から力が抜けてしまい、挙句には

「うっ・・・・ひぐっ・・・・うううっ・・」

涙が出てきてしまった。情けない、もう泣かないと誓ったはずなのに止めようと思っても全然止まらない。

「い〝っ！ちょ、えっ、泣くなよ！あーえっと、ええええっ、」

彼が物凄く動揺している。私は今のうちに泣くのを何とか止めて、深呼吸をして心を落ち着かせる。

「・・・・・もう、・・・・大丈夫。」

「そ、そうか。」

「お願い。私の母を・・・・助けて。」

私は彼にお母様を助けてくれるよう頼んだ。

「ん～そうだな、俺の言う条件を飲んでくれたらいいぞ。」

「何でも聞く。」

お母様が助かるのであれば私は何でもしよう。たとえそれが体を差し出す事でも。

「おう、そうか。それじゃあ・・・・」

ルイズSide

ドッゴォォォォォォォン！！！

また、失敗した。なんで！なんで！なんで！！！

「おいーwwwまた失敗か？」「ハハハハハ、見りゃわかるだろ」「ゼロ相手には使い魔の方も嫌がってるんじゃないか」「そうかもな！」「もう、諦めて留年しちゃえよ」

周りからたくさんの嘲りの声がする、うるさいうるさいうるさい！！私は、私は！

「その・・・ミス・ヴァリエール？今日はもうやめに止めにしませんか？明日また気分を変えれば成功するかもしれませんし。」

コルベール先生がもう終わりにしようと言って来た。明日また「サモン・サーヴァント」をさせてもらえるのは先生の優しさだろう、でも！

「あ、あと一回！あと一回だけやらしてください、お願いします！」

そんなの嫌だ！周りに馬鹿にされたまま終わるだなんて・・・惨め過ぎる。

「それじゃあ、最後に一回だけですよ。」

「はい」

私はもう一度呪文を唱える。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、五つの力を司るペンタゴン、我の運命に従い・・・・・私の運命を変えてくれる！・・・強く、最高の使い魔を召喚せよ！」

お願い！始祖ブリミルよ、私に、何でもいいから召喚させて！

ドォッゴォォォォォォォォォン！！！！！！

## 話し合い的な事をした（後書き）

どうでもいい補足情報
その1、北花壇騎士団であるタバサは大人な知識はあります。
その2、シャーマンキングの能力はご都合展開のための能力です。
その3、シルフィードは乗り物要員として出します。

## テイルズ　オブ　ゼロ　なんて題名を付けてみたり（前書き）

遅くなりました。今回はルイズとチート転生者のジンの話し。主人公は出てこないよ。

**テイルズ　オブ　ゼロ　なんて題名を付けてみたり**

リオンＳｉｄｅ

「どうやら僕の番のようだな。」

「ジューダス！？」

カイルが悲痛な声で僕の事を呼ぶ。

「お前達との旅、悪くは無かった。」

僕は仲間達に最後の挨拶をする。

「ジューダスは此処から消えたらどうなっちゃうの！？」

「わからない、次空間の彼方をさまようか、リオン・マグナスとして消滅するか・・・でも僕はこの運命に感謝している。お前達に出会えた・・・一度死んだ男が手にするには大きすぎる幸せだ。ありがとう、カイル、ロニ・・・さらばだ」

少しづつ僕の体が光となり、そして僕はこの世界より消えた。

（我・・・・・ヴァリ・・・ンタゴン・・・・・・・・）

なんだ？・・・この声は？・・・僕は消えたはず。僕は戸惑いを覚えながら自分の姿を確認をし周りを見渡す。そこは蒼くまるで海の中のような所だった。

「ここは、次空間の彼方と言うやつか。どうやら僕は神にとことん嫌われたらしいな。」

自嘲気味に僕は呟く。神等ろくでもない者だと分かっているだろうに。

（・・・私の運命を・・・・・）

また？一体何処から聞こえるんだ？僕はこの蒼い空間を再度見渡してみる、しかし周りは何処までも続く何も無い空間だけ。

「幻聴か？確かにこんな所に居続ければ人間などすぐに精神をやられるな。」

僕はそう呟く。僕自身も何時まで正気を保っていられるか、僕はその時が来るまで身を任せて空間に漂おうと思い静かに目を瞑った瞬間、

（・・・・を召喚せよ！）

また声が聞こたが、しかしその声が今までのとは違い空間全体に広がるように響き渡る。僕は状況を見ようと目を開けたら僕の前に光る鏡の様な物が浮かんでおり僕を引き寄せていく。踏み止まる事もどこかに掴まる事も出来ず僕は鏡に飲み込まれた。

ドォッゴォォォォォォォン！！！！！

鏡に飲み込まれた僕はとてつもない爆音に驚きすぐさま腰の剣を抜き戦闘態勢になる。周りは土煙でまったく見えず僕は感覚を研ぎ澄ませる。

「あーはははははは、やっぱりゼロはゼロなんだよ。」

声が聞こえてきた。感じからして１０代の人間の声だ、

「まったく、無駄な事しやがって。」「ホントホント、すぐに諦めちゃえばいいのに。」

それも周囲に十数人ほど、気配の感じから戦闘をする感じではない事が分かる。

「ミス・ヴァリエール、残念ですが・・・・・！！？」

「おい！何か居るぞ！」「うそ、ゼロが魔法に成功した！？」

土煙が晴れていく、僕がそこで見たものは・・・・

ルイズＳｉｄｅ

「あんた、誰？」

土煙が晴れた後、そこに両手に剣を持った男の人が居た。

「・・・・・・・・・・・・・」

「むっ・・・ちょっと！私の話聞いてるの！？」

男は何も言わないまま周りを見渡している。この私が話しかけてるのに無視するなんていい度胸じゃない！大体、変な仮面なんかしち

ゃって何なのかしら！服は全身真っ黒な妙な刺繍の入った服に趣味の悪いマン・・・・・ト・・・・・・って、え？・・・・マント？あれっ？え！

「おい、あいつマント着けてるぞ。」「つまり貴族（メイジ）ってことか？」「でもあいつ剣持ってるぞ？」「剣型の杖じゃないか？」「って事は、ゼロは貴族を召喚したのか？」「それってヤバいんじゃないか？」

「み、皆さん落ち着いてください！」

周りが男の事で騒ぎ出したのを先生がたしなめているが私はそれど比ではない。男が別の国の貴族、しかももし地位の高い家柄の人物だったら国際問題になりかねない。ど、どうしよぉ・・・。

「おい貴様等、此処はどこだ。」

男が話しかけてきた。

「え、えっと、その、こ、此処は・・・」

「此処はトリステイン王国のトリステイン魔法学院です。」

混乱していて上手く答えられない私の代わりに先生が答えてくれた。さらに・・・

「いきなりこのような事になり本当申し訳ございません。不躾な質問で申し訳ありませんが貴方は何処の貴族でいらっしゃいますか？」

私の聞きたい事も聞いてくれた。男は先生の答えに対し怪訝な表情

をし、少し何かを思案したかと思うと、剣をしまい先生に質問をしてきた。

「お前、セインガルド王国、ファンダリア王国。この二つの国の名をしっているか？」

「す、すみません。そのような国の名前は聞いた事が無く・・・」

「なら、レンズと言われる物質はわかるか？」

「いえ、それも・・・まったく。」

男は先生に聞いた事の無い国の名や物の名を聞いた後また黙ってしまった。

「あの、貴方はさきほどの国の貴族なのですか？」

「・・・いや、僕は貴族ではない。」

なっ！貴族でもない無いのにマントを着けてるなんて、失礼なやつ！

「ちょっと貴方！！貴族でもないのにマントを着けてるなんでどう言うつもり！」

私は男対して文句を言う。

「ん？なんだお前は。」

「なっ！？なんだじゃないわよ！私は貴方を召喚したご主人様なの、わかる？」

「・・・・・・なんだ、ただのバカか。」

「！！！？？！！」

「おい、聞いたか？」「ああ、アイツ貴族じゃないんだってな。」「じゃあ、武器を持ってるし傭兵の平民か」「なんだ脅かしやがって。」「所詮ゼロはゼロって事か。」「しかも召喚した平民にバカにさせれてるぞ。」「みっともない。」

こいつ、私に向かってバカって言った！このヴァリエールの三女である私に対してなんて無礼なヤツなのかしら！！きっとどこか遠い辺境の田舎者に違いないわね。周りの奴等もまた騒ぎ始めてうるさいのよ！！

「ふむ、ではミス・ヴァリエール。彼と儀式の続きを。」

「えっ！？」

まさか、こんな無礼な男を使い魔にしなければいけないのだろうか？

「待ってください。これはきっと何かの間違えです。もう一度やり直させてください。」

「ミス・ヴァリエール。これは神聖な使い魔の召喚儀式だ、やり直す事はできない。さぁ続きを。」

そ、そんなぁ～。ううっ、こんな無礼で変な仮面を被ってるヤツを使い魔にしなきゃならないなんて、最悪だわ。

「あんた、平民が貴族にこんなことされるなんて本当は無いんだから一生感謝しなさいよね。」

「お前は、なにバカな事をいってるんだ?」

「くっ!また、バカって・・・・まぁいいわ。五つの力を司るペンタゴン、この者に祝福を与え、我の使い魔となせ。」

私は呪文を唱えて男のにキスをしようと・・・・・・

「ちょっと、その変な仮面取りなさいよ。」

「なぜ取らなくてはならない。それに使い魔とはなんだ。」

「ああもう!私の言う事を聞いてればいいのよ。」

いちいち口答えしてくる男に私は飛び付き無理矢理仮面を取る。

「くっ、貴様なにをする!」

「うっさいわね!あんたが言う事・・・聞か・・ない・・から・・・・」

「うそ・・」「カッコイイ〜?」「超美形?」「?????????」「私の王子様??」

こんな変な仮面を被っているから素顔も変だと思っていたら・・・・すごく・・・・カッコイイ////////

たぶん歳は私達と同じぐらい、切れ長の目にサラサラな髪、そして美形。わっわっふぇ!

「おい、それを返せ。」

「・・・・えっ！あっ、いや・・・」

どうしよう、コレ返したらキスができ・・・キ、キス！え！この人とキス／／／／／。お、落ち着きなさいルイズ。コレは神聖な儀式であってやましい事はなにもないのよ！そ、そうよ！ど、堂々としてればいいのよ。

「あああああんた！こ、これを返して、その・・・欲しかったら！そこに屈みなしゃい！！！」

／／／／／／／／／／／／／！！か、噛んだーーーー！！あああーー！何やってんのよ私！恥ずかしいーー。ハッ！ダ、ダメよルイズ、こんな事で取り乱しちゃ。私はなんとか冷静を装いながら彼の顔を見る。

「ふっ」

鼻で笑われたぁぁぁ、うぐぐ、落ち着きなさい私、私はルイズなのよ、あのヴァリエール家の三女なのよ、ガンバレ私。

「わ、笑うんじゃない！とにかく屈んで！」

「はぁ、これでいいか。」

・・・・・・・・はぁ～カッコイイー。って見とれてる場合じゃない！私は意を決して彼に近づき・・・

「んっ！」

「！？」

キスをする。

「！？・・・貴様何をする！」

「／／／／／／／／／つ、使い魔の・・・契約をしただけ・・・よ。」

「使い魔の契約だと？・・・くっ！な、なんだ！」

「あっ！だ、大丈夫、使い魔のルーンが刻まれてるだけだから。」

「つ、使い魔の、ルーンだと？・・・うっ、意識が・・・」

「えっ！ちょっと！」

彼はルーンが刻まれ始めるとフラフラと倒れて意識を失ってしまった。なんで！？

ジルＳｉｄｅ

な・ぜ・だーーーー！！！！！おいおいおいおいおいおい！！！！なんでリオン・マグナスが召喚されんだよ！才人じゃないんだよ！タバサちゃんには変なイケメン、ルイズにはリオン、一体全体どー

なってるんだ！クソッ、これじゃあ俺の無双でハーレムな計画がぁぁぁぁ！！

「ミスタ・アルベルト！聞いているのかね？君が最後だ。さぁサモン・サーヴァントを」

「あ！はい、すいませんミスタ・コルベール。」

「君が呆けているなんてめずらしいですな。」

「あはははは、僕も少しは緊張しますよ。」

うるせーなハゲ、こちとらパニクってたいへんなのに！が、愚痴ってても仕方ない。俺も使い魔を召喚してこれからの事を考えなければ。

「ついに？あの？アルベルトがサモン・サーヴァントを」「たった１０歳でスクウェアになったて言う」

「しかも全ての属性が使えるんだろ。」「いったいなにが召喚されるんだ。」

さて、俺にはなにが来るかねぇ。まぁチート転生した俺なんだから使い魔もそれ相応の物が来て当たり前だよな。タバサちゃんとルイズの件もあるし俺も異世界の魔獣とかくるかもな。ふふふふ。

「・・・我が名はジン・アークレイン・ロ・ランタ・グシセイア・キ・アルベルト、五つの力を司るペンタゴン、我の運命に従い、使い魔を召喚せよ！」

ブゥン！

目の前に召喚の門が現れる。はてさてなにが・・・・

「・・・・・・・・よ・・・・・・・わ・・・・・・・てい・・・・」

ん？なん・・・だ、門から・・・声が・・・？

「・・・・・れる。こ・・・・・・・・・なのね！！」

・・・・・き、聞こえてる！！確実に人の声！しかも女性だと！えええええええええ！！俺もか！？俺もなのか！？い、一体誰が来るんだ！？俺は門から少し離れて様子を見る。すると

「おお！！神よ！これが薄幸で宇宙一の美少女である私の運命だと言うの！！なんて、なんてすばぁあぶぅ！！」

なんかヤバイ事を言いながら女の人が出てきてすっころんだ。えーと、外見は黒髪のロングヘアーで顔はチラっと見たけど結構可愛い。身長は１６０あるか？まぁそん位、服装は・・・・なんて言ったらいいのだろう？白をベースに青と黒の色が入ったコート（？）でいいのか？のんな感じの物を着ている。

「また？」「今年は一体どうなってるんだ？」「アレベルトまで」

さすがに3人も人間が召喚されれば周りのバカ共も不審に思う。しかし・・・

「ふむ、・・・・・ミスタ・アルベルト、儀式の続きを」

やはり、この世界のメイジはバカらしい、ってか見ず知らずの女性にキスしろと？さすがの俺でもそれは気が引ける。なにより初めて

だし。

「ミスタ・コルベール。相手は女性ですので、さすがに一方的なものは善くないと思います。せめて事情を説明してからでもよいかと。」

「ああ、そうですね。それでは私達は先に戻ってますので終わったら来て下さい。」

そう言ってコルベールは生徒を連れてフライで教室に戻っていった。

・・・終わったらって、この娘使い魔にするのアノ人の中では決定かよ！とにかくこの娘を起こすか。

## テイルズ　オブ　ゼロ　なんて題名を付けてみたり（後書き）

どうでもいい補足情報
その1、ルイズは才人（変態）に惚れるぐらいだからリオンに一目惚れしても不思議じゃないと思います。
その2、リオンの術技はテイルズシリーズの全剣技、地闇の術を使います。
その3、ジンの能力は投影魔術（制限無し）、ニードレスの全フラグメント、身体能力及び魔法の才能の成長限界突破。

## 不幸のワイン煮込みチートソース添え（前書き）

このＳＳを書くに当たってゼロ魔とタバサの冒険の時期合わせをしたら、タバサの冒険の１話・６話・７話の時期が不明なことが分かったのでつじつまが合わせにくい１話と７話は書かない事にした。もしかしたら他にも面倒臭いストーリーを書かないかもしれない。とりあえず努力はする。

## 不幸のワイン煮込みチートソース添え

ジンSide

「あ、あの大丈夫ですか？」

俺は門から出てきて転んでからピクリとも動かない女性に声を掛ける。

「・・・・・・・・」

返事が無いまるで屍のようだ、・・・・・・っゆーかホントに息してるか？全然呼吸音が聞こえないんだが・・・

「ね、ねぇ君、大丈夫かい？」

もう一度たずねる、今度は彼女を揺らしながら起こそうとしたが・・・・・・なんか、冷たい。

「えっ？・・・・ちょっ！！！」

俺はあわてて彼女を仰向けにして抱きかかえるように上半身を起こす。まず呼吸・・・・してない。次！脈・・・・・・無し、え・・・・死んでる？・・・俺は恐る恐る彼女の顔を見る、血の通ってない真っ白な肌、紫の唇、そして・・・・・瞳孔が開きハイライトが消えた眼・・・・・・・・・・・・・が俺を見た・・・！！！！！！！！？？？！？

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

俺は驚いて彼女を思い切り投げ飛ばしてしまった。ハッキリ言って怖かった、昔オーク鬼や盗賊とかをミンチにしたり焼いたり斬ったりして死体には慣れてるけど、今のはソレとは違った怖さだよ。彼女は3階ぐらいの高さの宙を舞いそして、

グシャ！

頭から地面に落ちた。

「いったーーーーーーーーい！！」

彼女は頭のタンコブを両手だ押さえながらうずくまる・・・・・って

「なんでやねんっ！！！」

いや、だって！息が！脈も無かった！瞳孔も開いてた！！さらにはあの高さから頭を打って痛いですむとか！俺、絶対ヤバイなにか召喚したよ、外見は美少女でも実際は完全な人外だな・・・・あれ？そう考えれば俺最高の使い魔召喚したんじゃね？しかも美少女・・・・・・問題無いじゃん！むしろラッキーじゃん、俺のハーレム計画に1人美少女増えたんだから。なら、やる事は簡単。

「大丈夫かい？」

篭絡するのみ！

「え？あ、はい。ちょっと頭打っただけなので、えーっとどちら様でしょうか？」

「失礼、僕は名をジンと言いまして、貴方のお名前も御教え頂けな

いでしょうか。」

「はい、私は烏丸ちとせ、と申します。」

「じゃあチトセちゃんだね（ニコッ）」

決まった。チトセちゃんは顔を赤くして俯いてしまったが完璧だろ。ふふふ

「・・・・ブツブツブツ・・・で・・・きた・・・ブツブツ・・・（ニヤリ）」

ん？なんか言ってるが小声でよく聞こえない。
バァッ！
チトセちゃんが顔を思い切り上げて俺の顔を瞳を潤ませて覗き込むように見上げてくる。うわぁ、超可愛い。そして、
ゴフゥ！バタッ
盛大な吐血をして倒れた。

「えええええええええええええええええええええええええ！！！！！！！！！！」

もうどう対処したらいいのか解らない！

「ああ、実は私どんな高名で実力もある宇宙一の医者でも治せない不治の病に侵されているんです。ゴフッ、私は昔から体が弱く・・・・・・」

なんか吐血しながら自分語り始めちゃったよこの娘。うわぁ、篭絡とか言ってるレベルじゃないよ、ツッコミどころ満載な自分語りも

そうだけど不治の病って・・・あ、そうか！その病を俺が秘薬と魔法で治せば万事解決じゃないか！よし、まだ大丈夫だ問題は無い。

「・・・・・・だから、キスしてください！！！！ムチュゥゥゥ～」

・・・・・彼女が口を3の形にして突き出してくる。・・・・・・・・・・・ごめん、話しを聞いてなかった俺も悪いけどさぁ、一体なにがどーしてそうなった？前言撤回、問題有り過ぎじゃあ！！！ぬぐぐぅぅ、しかしどっちにしろコントラクト・サーヴァントでキスはしなくちゃいけないし・・・くっ、しょうがない。

「チトセちゃん・・・・」

「ムゥムゥムゥ」

俺は彼女の3の口にキスをする、すると

「ああっ！！！！！私の王子様ァァ！！！！貴方のキスのおかげでぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！？！？」

チトセちゃんは急に起き上がり芝居がかった感じでクルクル回りながら喋り始め、そして突如スッ転び首の後ろを両手で押さえながら地面の上でのたうち始めた。

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！！熱いぃぃぃぃぃ！首が燃えるぅぅぅぅぅぅ！！？」

おお、神よ。いつか貴様を殺す。

鬼奇Ｓｉｄｅ

いやー、ビックリした。だって俺の能力とかタバサの母親治せるって教えたら急に泣き出したと思ったらさらに俺に助けて欲しいとか言い出すし。うん、現実は厳しいと思ってたら実はそうでもなかった。それからは母親の治療の代わりに俺の生活を良くしてもらう事とルーンに制限を掛ける事を条件にし話し合いは終わり、２人で広場に戻っている。タバサにスクーターの事を聞かれたので答えられる範囲で答えた。

「おや？人が居なくなってる。」

「皆の召喚が終わったから教室に戻った。私達も行く。」

「あー、なるほど。」

みんなで空飛んで教室か、才人君はさぞ驚いただろうな。タバサは飛ばずに歩いて行く。俺も後に続きタバサを追おうとして、ん？あれ？俺は広場に人影が居るのに気づき足を止め目を凝らす。

「へ？」

そして俺はあまりの事にフリーズした、

「ん？どうしたの？」

「いや、なんでもない。」

タバサが急に止まった俺を見て声をかけて来たがテキトーに返事をする。この場合、俺の取る行動はただ1つ・・・見てない、聞いてない、喋らない、だ。はぁ此処は原作世界じゃなかったよ、メンドクセー。
その後は2人で教室まで行き教師の話を聞く。まぁ入ったときに笑い声があちこちから聞こえたがどうでもいい。ちなみにルイズともう1人の生徒は使い魔の容態が悪いから2人は早退、コチラは教師曰く午後からは使い魔との交流で授業無しだそうだ。そんで話しが終わると俺達はすぐに教室から出て行く

「何処行くんだ?」

「私の部屋。」

「そうか。」

そんな感じで俺達は寮へと行く。しかししばらくして、

「ターバーサー。」

後ろから声を掛けられタバサが止まる。

「タバサ!見て見て、私の使い魔。サラマンダーよ!しかもこのツヤ、大きさ、そして尻尾の炎!どう考えても火竜山脈の物に違いなの!どお、微熱の名にふさわしいと思わない?」

わぁーお、なんかギャルっぽいの来たよ、俺こうゆう人苦手なんだよな〜。・・・・明鏡止水。俺は畏を発動させて認識出来ない様にする。このギャルのマシンガントークに入れられたく無いし。

「・・・・・・でね、ルイズったら物凄くカッコイイ人を呼び出したのよ！ハッキリ言ってルイズには勿体無いぐらいなの。あ、そう言えばタバサも人間を召喚したわよね？ソイツはどこに居るの？」

うわ、畏を使っておいて正解。

「彼ならそこに・・・」

タバサが俺の方を向くが、

「へ？居ないわよ？」

「・・・！？？？」

明鏡止水で認識できなくなっているので誰も居ないように見えてしまう。

「まぁいいわ、じゃあまた後でねー」

ギャルはひとしきり喋った後そそくさと行ってしまった。あの手タイプはホント苦手だ。俺は畏を解きタバサに声を掛ける。

「なぁ、あいつ何て名前だ？」

「！！！？？」

ブゥン！！

いきなり杖で殴られそうになったので避けた。

「危ないな。」

「何処にいたの？」

「ずっと此処に居たが」

「・・・うそ、居なかった。」

「ああ、それはただ気づかなかっただけだ。」

「・・・気づかなかった・・・だけ？」

「そゆこと。で、アイツの名前は？」

「キュルケ。」

キュルケか、よし覚え直したぞ。

「そうか、んじゃ部屋に行こ。」

俺はタバサの疑問をテキトーにはぐらかし部屋に促す。それからなんやかんやで部屋に着き俺は椅子に座る。タバサはベットに座り本を読み始める、・・・平和だな。・・・・・・・・お昼になった。

「そう言えば俺は飯、どこで食えばいい？」

「・・・厨房に頼んで貴方の分を追加してもらう。」

「わかった。」

あの場所で食うのか、後でテキトーに言い訳して次からは厨房で食

べさせてもらおう。

「それと、午後に貴方に頼みたい事がある。」

「ん？・・・わかった。」

・・・・・・昼飯を食った、周りの視線がウザかった、キュルケに遭遇して精神的に疲労した、次から厨房で食べられるようになった、以上。そして部屋に戻ると

「え？買い物？」

「そう、ここに書いてある本を買ってきて欲しい。」

俺はタバサからメモを渡された。

「・・・どこに？」

ってか、この世界の地理全然分からないのだが、それに文字も読めないし。俺はタバサにそのことを伝えたら、

「これ。」

地図を渡された。

「印を付けた。迷ったら聞けばいい。」

「・・・俺の条件忘れてないだろうな。」

「忘れてない、だから貴方も必要なものを買ってくるといい。」

タバサはそう言ってお金を渡してきた。

「むぅ、ならしょうがないか。」

貨幣の単価もよくわからないが何とかなるだろう。それにルーンに制限を掛けるのに人目の付かない所に行きたかったからちょうどいい。

「そんじゃあ、行ってくる。」

コクッ

タバサはそれに小さくうなずいた。俺は本と私物を買いにトリステインの城下町に行く。

## 不幸のワイン煮込みチートソース添え（後書き）

どうでもいい補足情報
その1、烏丸ちとせはアニメバージョンです。しかも色々パワーアップしてます。
その2、ジンはチート能力で調子に乗ってますが基本ビビリです。
その3、鬼奇は正々堂々が嫌いです。

**串焼きを奪われた時は殴りたいとホントは思った。（前書き）**

シルフィードに関してはオリジナル任務で仲間にしようと思ってたけど、タバサの冒険第九話がちょうど良いストーリーだったのでそれを使う事にした。

**串焼きを奪われた時は殴りたいとホントは思った。**

イルククゥＳｉｄｅ

「きゅいきゅい！私、人間の居る所に行ってみたーいー。」

「イルククゥ、そんなわがまま言っちゃいけません。それに人間っていうのは昔から言うようにとても野蛮で残忍な生き物なの。人間は私達『韻竜』が絶滅したと思っているから安全に暮らせているけどもしばれたら捕まえられて酷い目に合うのよ。」

「そんなの精霊魔法で変身すれば問題ないのね、きゅい。」

「なにいってるの！大いなる意思の力をそんなくだらない事に使っちゃダメ。」

「ううう、もういいのね！」

私は竜の巣での生活が退屈で嫌で両親にいつも外に出たいと言っていたの。でも両親は外は危険だからと絶対に外には出してもらえなかったのね。そしてついに私は親と喧嘩して自分の巣を飛び出し近くの泉に家出してきてやったのね。

「もう知らないのね、今日から此処で暮らしてやるのね。此処なら魚も取り放題だから問題ないのね。」

そうだ、まずは寝床を、

「おや、イルククゥじゃないかね。こんな所に居るなんて珍しいね。

何かあったのかい？」

「きゅい！おじーちゃん！」

私はおじーちゃんに家出した事を話したのね。

「ふむ、なるほど。確かに外の世界はとても危険な事がいっぱい有るからなぁ、お母さんの言う事は正しいな。」

「きゅい！？そ、そんなぁ～。おじーちゃんもお母さんの味方なのね！」

おじーちゃんなら分かってくれると思ってたのに。

「うむ、わたしも可愛い孫を危険な目に合わせたくはないからなぁ。」

「きゅい～。私は全然平気なのね。そんなドジなんかしないのね。」

「ふむ、しょうがない子だな。なら少しだけ見てきなさい、お父さんとお母さんにはわたしが言っとくからね。ただし日が沈む前には帰ってくる事いいね」

「！？・・・ホ、ホント！やったーなのね。」

「ほれ、人間の服だ。変身したらコレに着替えるんだいいね。」

「わぁー！おじーちゃん大好きなの！」

私はおじーちゃんから貰った人間の服を持って竜の巣を飛び出した

のね！

鬼奇Ｓｉｄｅ

ふむ、空はいいと昔の偉人さんは言ってたが確かにその通りだよな。俺は今タバサにおつかいをたのまれてトリステインの城下町に移動中だ。移動手段は鳥型の式神を出しソレに乗って空を飛んでいる。スクーターが使えればよかったが、この世界じゃガソリンなんてある訳ないし、それに馬で３時間とか遠すぎて往復する前に燃料切れになる。

「お、アレか。・・・予想よりショボイな。」

しかも、なんかゴチャゴチャしててやだなぁ。あ、そういえばスリが出るんだっけ？・・・・明鏡止水を使えばいいか。とか考えてる内に町の上空に。

「あー、上空に来てどうすんねん俺。ま、いっか。」

明鏡止水発動。で、式神を消してっと。ヒューと俺は落ちていく。そして、
ドスンッ！！
と、着地。

「うわぁ！なんだ！」「地震か！」「ああぁ、お花が！」

・・・・・・ま、いっか、よくないけど。俺はそそくさとその場か

ら逃げる。さて、

「とりあえず、本屋行くか。先に代金払って本を取って貰っといて、残りの金で自分の買い物だな。」

本を先に買っても荷物になるし、私物を先に買っても本代が足らなくなったら困るし。

「えーと、本屋はどこかなぁ～♪。」

俺は本屋を探して町をぶらつく。しかしホントにゴチャゴチャしてウザったいな。

「きゅい～、なんでご飯が食べられないのねー！」

「金持ってねぇんだから当たりめぇだろ！さっさとどっか行け！商売の邪魔だ。」

・・・・・・・・・何か居たー！たしかに俺がタバサに召喚されたんだからアイツは召喚されずにこの世界のどっかにいるとは思ってたけど、まさかこんな所に現れるとは。接触するべきか？どうしよう悩むな。う～ん・・・・・・とりあえず、様子を見よう。そう決めた俺はアイツを尾行しようとしたが、

「あれ？・・・居ない。・・・・・・あー、こんだけ人がいたんじゃ見失うのはしょうがない。」

見失ったので諦めて本屋を探す続きをした。

「しかしアイツ、普通に服を着てたな。アイツの事だから布切れ巻

いて町を歩くものだと思ってた。」

そんなどうでもいい事を考えながら町を散策してたら、

「お！本屋らしき店はっけーん。」

俺は目的地を発見し、中に入る。右見て、左見て、うん、本屋だ。俺はここがちゃんと本屋だという事を確認して、店の店主らしき人に話しかける。

「おっちゃーん、このメモに書いてある本をくれ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

無視かよ。

「おいコラ、声聞こえてるか。」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

ガンッ！！

店のカウンターをそこそこな力で蹴ってやった。

「気づけやコラァ！！」

「な、なんだ！！何が起きた！」

おっちゃんはいきなりの事に驚いてあっちこっちキョロキョロしている。何してんだコイツ、客が目の前に居るのに気づかないのか・・・・・・あ。・・・・俺は一度カウンターから離れて店の外に出る。そ

して、店の横の路地に入り、・・・・・・畏を解除する。そして、
また店に入りカウンターまで行き、

「おっちゃーん、このメモに書いてある本をくれ。」

「ん？あーはいはい、ちょっと待っててね。」

おっちゃんにメモを見せる。さっきの失敗はしょうがない。

「はい、こちらになります。」

ドサドサッ！！
多っ！！もって帰るのメンドクセー。

「あの、後で取りに来るので本を預かって貰ってていいですか？これ代金です。」

「いいですよ。はい、お釣り。」

俺がテキトーに置いた金貨を数枚取り、銀貨と銅貨を渡してきた。・・・・・ダメだ、さっぱり単価がわからん。まぁいいや、俺は店を出で自分の買い物を開始する。

「・・・っと畏の発動。これしないとスリにやられる。」

そんなこんなで町をぬらりくらりと徘徊中。・・・・・・迷った、服屋ってどこだ？

「・・・あの、服を売っている店って何処にあるかしりませんか？」

俺は近くを歩いていた人に話しかける、もちろん畏は解除済み。

「あらぁ～ん、貴方珍しい格好してるのねぇ。この町ははじめて。」

わお！店長さんだった。普通の服着てるから全然分からなかった。

関わりたくなかったのに。

「ええ、似たようなものです。それでお店の場所を教えて欲しいんですけど。」

「いいわよ。でもどんな服がほしいの？それによってお店の場所が違うんだけど。」

普通のが欲しいんだけど、この人の基準の普通ってなんかヤバそう。

うーん、なんて言えば・・・テキトーに言えばいいか。

「えっと、極々普通の服なんですけど。」

「あら？貴族様の御使いじゃないの？」

似たようなもんだな。

「まぁそのついでに自分の買い物をしてる感じですね。」

「そうなの、それじゃあ地図持ってる？」

「はい。」

俺は店長さんに地図を渡す。

「えっと、今居るのがココだから・・・・お店はココよ。」
店長さんは地図を指差し丁寧にお店の場所を教えてくれた。普通に親切だ。
「ありがとうございます。それじゃ。」
「どういたしまして。あ、そうだ！貴方お名前は？」
名前を聞かれたので
「鬼奇と言います。」
「キキ君ね。私はスカロンって言うの、魅惑の妖精亭ってお店やってるから気が向いたら遊びに来てね、サービスしちゃわ。じゃあね。」
普通に自己紹介をし合った。スカロンさんはお店の宣伝を俺にして優雅（？）に去っていった。もうちょっとアレな人かと思ったら案外普通だった事に驚愕だ。
「ふむ、やっぱり先入観で人を見ちゃいかんな。そういえば昔堕ちたヤツを滅する時、余裕ぶっこいてたら逆に殺されかけたなぁ。傷が治って退院したら姐さんにこっぴどく説教食らった上折檻と言う名の拷問を受けたな・・・・アレでまた入院するはめになったんだよな。」
姐さん怖い！やべ、ホームシックになってきた。俺は独り言をブツブツ言いながら教えてもらったお店へ行く。

「お！なんか旨そうなもん発見。」

途中露天でよく分からない串焼きの様な物があったので数本買う。うーん、いい・・・

「良い匂いなのね。」

ジーっと俺の串焼きをガン見してくる青い髪の頭の弱そうな女の子が現れた。ヨダレを垂らすな！

「・・・・・食べるか？」

「ハッ！た、食べていいのね！！」

「ああ・・・いいぞ。」

目をキラキラさせて俺に詰め寄ってくる青髪少女って言うかシルフィード。今はまだ違うか、あれ？コイツのもう1つの名前ってなんだっけ？まぁいいや。俺は串焼きを渡そうとして、

「ありがとうなのね！」

バシッ！！

袋ごと全部奪いやがった。お前はもう少し慎みを覚えろよ！

「きゅい～！！ハグハグハグッ！」

俺がそんな事を思ってるとは露知らず、物凄い勢いで串焼きを食べていく。はぁ俺の串焼きがぁ～

「ったく、それじゃあな譲ちゃん。」

「ツング！美味しいものくれてありがとなのねー。」

俺はそそくさとその場から離れ本来の買い物に戻り服屋を探す。

「ん～、ココっぽいな。」

町を徘徊しながら思った事は飲食店以外の店は凄く分かりにくい。そんな事を思いながら店に入りテキトーに買い物をする。とりあえず、下着っぽい物はあったのは行幸だった。他には店主に頼んで作務衣や着流しを説明し作って貰ったりした。他にも色々買ったりしてなんやかんやで買い物も終わり、本も取りに行きそして、

「帰る前にルーンをやっちまうか。」

そんで町から出て近くの森にひとっ走り。なんか森が全然見つかんなかったから結構遠くに来たが気にしない。

「さすがにここら辺なら人は居ないよな。さて、」

俺はルーンに制限を掛ける為ポケットから御札を出し、印を組み、言霊を呟く。

「～～～～～～～～～」

「きゅいきゅいきゅいきゅい！！」

ドッガシャーン！！！

森の奥の方からバカっぽい声と何かの破砕音が聞こえた。俺はとり

あえず自分の作業を続ける。

ドーンッ！ヒュン！ガツンッ！

どこからか飛んで来た何かが頭に当たった。俺は作業を早回しで終わりにして、よし。

「ぶち殺す。」

## 串焼きを奪われた時は殴りたいとホントは思った。（後書き）

どうでもいい補足情報
その1、シルフィードが城下町に居たのは世界修正による偶然です。
その2、タバサが鬼奇に買い物を頼んだ理由はスクーターを使うと思ったから。
その3、鬼奇は頑丈なのでこの世界のショボイ銃の流れ弾では傷つきません。

**悪人はとりあえずフルボッコするべし！と昔、先生に言われた。（前書き）**

鬼奇「他にも、悪・即・滅とか言って気に入らないヤツを病院送りにしてた。」

ちとせ「私の先輩は悪人に人権無しと言って命乞いしてる人を滅殺しましたよ。」

リオン「お前等の知人は頭がおかしいのか？」

**悪人はとりあえずフルボッコするべし！と昔、先生に言われた。**

鬼奇Ｓｉｄｅ

俺は明鏡止水を発動させて音のする方に行き

「この竜・・・、突然現れやがって・・・、いったいなんだっていうんだ？」「誰かがこの竜に女になる魔法でもかけたんだろうさ」

「とにかく、仕事の邪魔だからやっちまおうぜ」

ガラの悪い男共に近づき拾った木の棒で・・・

ズヴァァッン！！！ズシャァアアアアアアアアア！！

思い切りぶん殴る、手加減無く。殴られた３人は白目をむいて吹っ飛んで近くの木にぶつかった。

「な、なんだ！！」「急に吹っ飛んだぞ！」「この竜！！なにしやがった！！」

わらわらと悪人面が出てくる、今更だが状況整理・・・脅えている女性達・・・馬車・・・ゴロツキ。

「お前等人攫いか？」

俺は畏を解きゴロツキに訊ねる。

「な！だ、誰だお前！！」「いきなり現れた・・・、魔法か！」

何も無い所からいきなり現れた俺にゴロツキ共が慌てふためくが

「あんたら落ち着きな。」

「あ、あねご。」「すいません。」

馬車の後ろからいかにも?私こいつらのリーダーです?的な女の人が出てきてゴロツキを落ち着かせた。

「ふん、だらしないねぇ。で、あんた、一体何者だい?」

リーダー女は俺に対し杖を見せつけ威圧感を与えてくる。ふむ、女はメイジでなかなかの強さを持っている感じか。・・・・・それだけだな、テキトーに潰すか。

「ん〜、亡霊かな?」

「はぁ?何言ってんだいあんた?頭のおかしいヤツか?」

確かに俺なに変な事言ってんだろ。

「いやいや、ホントだよ。他にも幽霊とかお化けとか色々な呼び方があるけど。」

「うふふふ。へぇ面白いヤツだねぇ、で、その亡霊のあんたが何の用だい。」

「ん?別にたいした事じゃないよ。ただ、人間の負の感情に呼び寄せられただけだし。」

自分で言ってて何だがこの理由は無いよな。

「それじゃあ私達に用は無いって事かい。だったら・・・」

「何言ってんの？俺は亡霊だよ。亡霊がやる事と言ったら１つしかないでしょ。」

「急に何言ってんのさ？それにやる事？」

「そう、亡霊がやる事。それは見つけた人間の皆殺し。」

俺はそう言うと近くのゴロツキの頭を木の棒で殴り昏倒させる。やべ、強く打ちすぎて頭から血出ちゃったよ。

「な！！この野郎！」「やっちまえ！」

他の奴等が怒りに任せて俺に攻撃をしてくるが全ての攻撃を避け、そしてカウンターでコチラの攻撃を叩き込む。頭を殴り昏倒させたり、手足をへし折り動けなくする。

「いい気にんってんじゃ無いよ！ウインドカッター！」

女が杖を振り、魔法を放つが

スゥ・・・

魔法は俺をすり抜け後ろに居たゴロツキに当たる。

「ぐあぁ！！」「な、すり抜けただと！」「ば、化け物！！」

俺の姿はそのまま消えうせ、そして

「言ったろ。俺は亡霊だって。」

女の後ろに現れ、そして俺は女の腹部に一撃を与えて昏倒させる。
「あ、あねごがやられた。」「に、逃げろー！」
ゴロツキ達は女がやられると一目散に逃げて行ってしまった。ついでに空気状態だった兵士達もいつの間にかいなくなってた。さてと、俺は縛られている女性達に近づき
「ひっ！こ、殺さないで！」
「ああ、安心しろ、さっきあいつ等に言った事は全部嘘だから。」
「ふぇ？」
俺は事情を話しながら全員の縄を解き、
「よし、今度から攫われない様に気をつけて暮らせよ。」
テキトーに解放する。でだ、
「お前は帰らないのか？」
「きゅい、私、助けてもらったお礼をまだしてないのね。」
なんか、いきなりだな。
「別にお礼とか要らない。」
「そんな事言わないでほしいのね。それに貴方には食べ物をくれたお礼もあるのね！」

ああ、確かに。でもあれは奪ったに近いものがあるぞ。って言うか俺は人間姿のお前には合っているが、竜の姿のお前には合ってない事に気づいてないのか？指摘してやるか。

「・・・俺は青髪の少女に食べ物を渡した覚えはあるが、喋る竜にあげた覚えはないぞ。」

「きゅい！！それは私なのね！」

おいおい、いいのかそれで？

「・・・・えーっと、それは人間に変身してたってことか？それとも今は竜に変身してるのか？」

もう、めんどいなぁ。

「この姿が本来の私なのね！アレは精霊魔法で変身してたのね。」

「あはははははは、なぁそれって喋ってもいい事なのか？」

「・・・・・・きゅい！！あわわわ、で、でも貴方も精霊の力を使ってたのね。と言うことはあなたは人間じゃないってことなのね！私って賢いのね。」

「何故、精霊魔法だと思った？」

「だって、杖も呪文も無かったのね。だから・・」

「まぁ確かに俺は人間じゃ無いが、俺、貴族の使用人やってるぞ。」

使い魔って言うと混乱するからな、多分。

「きゅい！そ、そんな。私をだましたのね！」

「勝手に喋ったのお前じゃん。それと、竜って普通喋るものなのか？」

「ハッ！わ、私は別に韻竜なんかじゃないのね！喋ってるのもえっと・・・そう！たまたまなのね！」

すばらしい言い訳だな。しょうがない、もうこうなったら流れに身を任せるぜ。

「分かった分かった。じゃあ、もうテキトーにお礼をしてくれ。」

「そ、そうなののね！お礼なのね。・・・何をすればいいのね？」

流れすら無い！なんてレベルの高い竜なんだ！・・・これって世界修正ってやつか？コイツを仲間にしろっ言う感じ？世界って怖いわぁ～。

「ああ、もうさぁ。俺のお願い聞いてくれって事でいいか？」

「それでいいのね。さぁドンッとお願いをいうのね！」

「それじゃあ、とりあえず今から案内する所まで連れてけ。そこで願い事言うから。」

「きゅい！わかったのね。」

「俺の名前は鬼奇って言うんだが、お前名前は？」

「私はイルククゥって言うのね。」

俺はその後荷物を持ってイルククゥの背に乗り学院に戻る。とりあえず学院の近くの森にイルククゥを誘導して降りる。

「よっと。ちょっと待ってろ、タバサを呼ぶから。」

「きゅい？タバサって誰なのね。」

「青くてちっちゃい女の子。後は来てからのおたのしみ？」

「きゅい？」

さて、鳥型は・・・・・っと、あった。

ボンッ！

俺は式神を実体化させタバサの部屋に飛ばす・・・・そういえばこの世界にツバメ居なかったけど大丈夫かな？まぁいいや、俺は式神とリンクしてタバサの部屋まで行く。

タバサＳｉｄｅ

パタパタ！ヒョコ

私が本を読んでいると見たことの無い鳥が窓枠にとまった。全体的に黒く、小さくて細い感じだ。しかしなんだろう？生き物って感じ

がしない、かと言ってガーゴイルの類では無いこの鳥は一体。など私が鳥をジッと見ていたら鳥がコチラを向き、

「コノ体ニモ、ダイブ慣レテ来タゾ。」

ズババババ！！

私は反射的にウィンディ・アイシクルを鳥に向かって放っていた。私にしては浅はかな事をしたと思うがしかし、さっきの鳥が言葉を発したら何故か？アレ？をイメージしてしまっていた。鳥は私の攻撃が当たったら紙になってしまった。

「これは？」

私はバラバラになった紙を拾いソレを観察する。妙な形をしている、それに変な模様が付いてる。私がその紙を見ているとパタパタ、ヒョイ！

また同じ鳥がやってきた。そして

「わりぃ、ふざけ過ぎた。俺だ鬼奇だよ。」

鳥は最初のヤツとは違い彼の声で喋り掛けてきた。コレも彼の言う能力と言うやつだろうか。

「コレは何？」

私は興味がわいたのでキキに尋ねる。

「これは、式神ってやつだ。マジックアイテムと思ってくれればいい。それよりちょっと相談があるからこの塔から左側にある森に来てくれ。」

キキがそう言って鳥を外に向ける。私は鳥を追うためにフライを唱え窓から飛び立つ。私は森に着き、キキを探しながら周辺を見渡していると、

「おーい、こっちだー。」

奥から声が聞こえそちらに向かう、するとキキと風竜が居た。風竜の方はあまり大きくないので幼生だろう。

「これ、どうしたの？」

「あー細かく説明すると面倒だから簡単に言うと・・・・・・拾った。」

「・・・ちゃんと説明。」

「あー、面倒だな。えっとだな・・・」

あまりにも適当過ぎる説明に私はちゃんとした説明を要求した。キキはとても面倒そうに風竜の事を説明し始めた。キキの説明を聞いて私はいくつか疑問が上がった。

「ってな感じ？で、説明終わり。質問は？」

「貴方の話を聞くとその竜が喋ったり変身したりする事になる。」

そんな事が出来る竜と言ったら絶滅した韻竜ぐらいだが、

「ああ、こいつ韻竜ってヤツらしいから、そのおかげだろ？」

「きゅい！？ちょっと！私は韻竜なんかじゃないのね！」

「まぁこんな感じで少々アレだが。」

ホントに韻竜だった、確かによく観察すると目の色や鱗が普通の風竜とは違う。

「わかった。それでこの竜はどうするの？」

韻竜は絶滅されたと思われているから他人に見つかりでもしたら大騒ぎになる。できればソレは避けたいところなのだが、その相談だったのだろうか？

「こいつをお前の使い魔代理にしようと思う、っと言う事でイルククゥ、今日からこいつがお前のご主人様な。」

「きゅい！！どういう事なのね！なんで私がこんなチビ助の使い魔にならなきゃいけないのね！」

「使い魔なら貴方がいる。」

私は彼が突拍子のない事を言い出したので反論する。確かに風韻竜を使い魔に出来ればとても役に立つが

私にはキキがもう居る。

「はぁ、イルククゥ、なんでも願い聞くって言ったじゃねーか、韻竜ってのは約束も守れない駄竜なのか？」

「なっ！？そんなことないのね！！私は偉大な古代の眷属の風韻竜

なのね約束を破るなんて恥知らずなことはしないのね！」

「さすが偉大なる風韻竜、じゃあ約束通り俺の言うとおり今日からタバサの使い魔代理な。」

「わかったのね！・・・・あれ？なんか変なのね？むむむ・・・」

・・・キキが風韻竜を説得（？）をしてから私の方を向く、次は私を言いくるめる積りだろう。

「タバサ。」

「なに。」

「もう、面倒だからペット感覚で飼っちゃえよ。」

説得でもなんでもなかった。キキは話術が効く相手にしか説得をしないみたいだ。

「世話はどうするの？」

「他の奴等の使い魔と一緒にしとけば勝手に使用人さん達が世話してくれるだろ。」

・・・自分で拾ってきたくせに他人任せとはどうだろうか？しかし否定できない。

「わかった。この子の事は私が先生に言っておく。今日は貴方がその子を世話をして。」

「おう、何とかしとく。」

彼はそう言ってあの子の所に行く、私はこの事を伝えるために学院の職員部屋に行く。そういえばあの子の名前を考えなければ、イルククゥのままでは流石に怪しまれる。

## 悪人はとりあえずフルボッコするべし！と昔、先生に言われた。（後書き）

どうでもいい補足情報

その１、これといって思いつかなかった。（ｂｙ作者）

**一日目、滞りなく終了いたしました。（前書き）**

鬼奇「そういえば使い魔のルーン、何が出た？俺は『ニュアージュ（雲）』だけど。」

リオン「僕は『ガンダールヴ』だ。」

ちとせ「私は『ヴィスィウー（悪徳）』でした。」

**一日目、滞りなく終了いたしました。**

ルイズＳｉｄｅ

「それはホントなの？」

私は彼の話を聞いたが何というか信じがたいという感じで言葉を返した。

「ああ、本当だ。」

「ココとは別の世界ねぇ。しかもショウジュツ？っていうのが魔法の代わりにあるって急に言われても信じられないわ。」

「ソレが普通の反応だな。昔の僕ならお前と同じ反応をした。」

彼・・・リオンは私にそう言い返してきた。私達は召喚の儀式の後意識を失った彼をジンに頼んでレビテーションで運んでもらった。そういえばジンも私と同じで人間を召喚していた、一体今回の儀式はどうなっているのだろう。その後リオンは夜まで目を覚まさず、先ほどやっと目を覚ましたので夜食を食べながらお互いの話しをして今にいたるという訳。

「ふーん、ねぇリオン、その変な仮面外さないの？」

「コレは今の僕が僕であるための物だ、それに大切な思い出でもあるからな。」

「へぇー。」

私にはよくわからない。男の子ってそう言うもんなのかな？

「ねぇ、リオンが使う晶術ってのを私見てみたいんだけど？」

「別にかまわないが僕は攻撃系の晶術しか使えないからココでは無理だぞ。」

「む、それならしょうがないわね。」

やっぱり私達が使う魔法とは違うのよね。

「ねぇリオンは元の世界にやっぱり帰りたい？」

この世界のどこかから来たのであれば時間を掛けてでも帰せるけど別の世界ならそうもいかない。私は少しだけ罪悪感を感じていると。

「先ほども話したが僕は本来なら死んでいたんだ、今更向こうに帰ろうとは思わない。まぁ未練が無いとは言えないが。」

リオンはそう言ってくれて私としては安心する。

「それよりも僕の寝床をもうちょっとマシにしてほしい所だな。」

リオンは皮肉気に部屋の隅にある藁束を見る。

「しょ、しょうがないじゃない！だって使い魔は何かしらの動物が出ると思ったんだから！」

「別に責めてる訳じゃないさ、出来れば藁を多くしてシーツと掛け

布団をくれればいいと言ってるんだ。」

「ふぇ？そんなんでいいの？」

私はリオンの要望に首を傾げる。

「ああ、旅をしていた時野宿なんてざらだったからな、それだけで寝られるとこは出来る。」

「へぇ～」

リオンは向こうでは旅をしていたと言っていたけどホントなんだ。

「でもリオン、今は私の使い魔なんだし、旅をしてる訳じゃないから別に遠慮なんていいのよ。ちゃんとした寝床ぐらい私が何とかしてあげるわ。まぁ今日はもう無理だからそこで我慢してね。」

「まぁ期待しておこう。今日のところは椅子で寝させてもらう。」

リオンはそう言ってそのまま俯いて休み始めた。私もベットに入り明かりを消す。

「おやすみ、リオン。」

「ああ。」

そうして私達は眠りに着いた。

ジンSide

「お前はホントに何なんだ！！」

俺は流石に彼女に向かって叫んだ。儀式の後俺は意識を失ったチトセちゃんとルイズが召喚したリオンをレビテーションでリオンはルイズの部屋へチトセちゃんは俺の部屋に運び、俺は彼女が起きるまで部屋でのんびりしていた。そして夜になってから彼女は意識を取り戻し改めて自己紹介しあったのだが、

「は？今更何言ってるんですか？さっき自己紹介したじゃありませんか。」

「そう言う事言ってんじゃないんだよ。アンタさっきから自分勝手な事言いすぎたって事を指摘してるんだ！」

俺が召喚したチトセちゃん・・・滅茶苦茶自分勝手なんだよ！！最初は俺も美人だし少しくらいはって思ってたけどこの世界の事や俺の事、チトセちゃんの立場を説明したら、

「チッとんだド田舎惑星かよ。」

とか言い出したんだよ！その後も

「ご飯たべたい」「お風呂は？」「このベットで私は寝るから貴方床ね」

・・・・ってなんだよ！自分の立場分かってるのかってーの！そんで俺がワガママ言うなら追い出すぞって遠まわしに言ったら、

「いいんですか？私、自慢じゃないですが他人から同情されたり哀れみを受けたりするの得意なんですよ。しかも貴方の本性まで知っている、意味解りますよね？」

逆に脅された！！悪魔だ、悪魔がいる。俺もここまで言われて大人しく引き下がる訳にもいかず、

「チトセちゃん君は不治の病なんだろ、僕ならそれを治せる訳だけど、どうする？」

俺は完璧な脅しを仕掛けたが

「ああ私、小さい頃から病弱だったもので今ではもう自分の意思で自由に病を発症させたり治したりする事が出来るのでご心配なく。」

と笑顔で言われた。もう人間技じゃないよ！俺はこのままでは打開策が見つからないのでチトセちゃんの事を聞き、対策を練ろうと思いチトセちゃんの事を聞いたが

「私は、トランスバール皇国軍近衛特別部隊ギャラクシーツインスター隊所属で主な任務としてはロストテクノロジーの回収や調査等、他にも反乱分子の鎮圧や・・・・・・・」

超ＳＦ単語の羅列をグダグダと聞かされた。そういえばさっきから宇宙とか惑星とかソレっぽい単語がたくさん出てきてたけどチトセちゃんってＳＦキャラだったんだね。オリキャラか？で、なんやかんやで今に至る。

「はぁ私ってなんて不幸なのかしら。王子様と思って唇を捧げたの

に中身はこんな残念な殿方だったなんて。はぁぁぁぁ～。」

「俺は大切な使い魔の儀式でお前の様なヤツが出てきて残念だよ。なんで召喚の門に入ってきたんだ？」

俺は一番の疑問を聞いてみる。

「別に好きで吸い込まれた訳じゃないですよ。先輩達と亜空間で離れてしまって1人で漂ってたら変な鏡の様な物に吸い込まれたんです。」

「へ？もうちょっと詳しく教えてくれ。」

コレは詳しく聞いておいたほうがいいと俺の勘がいっている。

「え～、話すと長いんでイヤです。」

「話せよ！？」

「はぁ～、しょうがないですねぇ。簡単に説明しますと、いつもの様に先輩達を貶め様と画策してヒ素を混ぜたケーキを差し入れにエンジェルルームに行ったらですね、ミルフィーユさんがまたロストテクノロジーを発動させてましてエンジェル隊の先輩方共々亜空間に吸い込まれまして、そしてさっき話した通りココに来たって訳です。疲れたんでちょっと飲み物持ってきてください。」

「そこに水あんだろ！」

しかし、アレだな・・・ツッコミどころが多過ぎて対処できない。貶める為にヒ素とか、死んじゃうじゃん！

「なあ、チトセちゃんの先輩達ってどうなったんだ？」

もしかしたらこの世界の何処かに居るかもしれないし。

「さあ？まだあの亜空間で彷徨ってるんじゃないですか？ふっ、いい気味ですね。いつも私を蔑ろにするからいけないんです。ざまーみろ！おーほほほほほほほ！」

わぁー、ホントこいつろくでもないなぁ。もういいや、寝よ。

「おい、もう寝たいから明かり消すぞ。」

「え？あ、はいそれではお休みなさい。」

そう言ってチトセちゃんはパジャマになって布団にくるまった・・・・・・・・・・一体何処からパジャマを出した？そして何時着替えた？もう俺は彼女の事で考えるのが辛くなり予備の布団に包まり寝た・・・・床で。

タバサＳｉｄｅ

「なぁ、お前の母親は何時治しに行くんだ？」

あの後部屋に帰ってきたキキが椅子に腰掛けながら聞いてきた。私は本当なら竜も手に入ったし、すぐにでも屋敷に帰りお母様の心を取り戻したいがしかし、あの男が屋敷に何もしてないはずが無く、

私が妙な事をすればどうなるか分からない。

「今はまだいい。」

「?、どうしてだ、泣くほど・・うおっ！」

ヒュンッ！ガッ！

私は横に積んであった本を投げつけた。・・・本は大切に扱わないといけないのに、キキがあんな事言うから悪いんだ。

「屋敷に監視が付いてる可能性がある。」

「ああ、なるほど。」

キキは納得した様子でさっきの本を拾ってテーブルの上に置いた。そういえばちょっと気になる事が、

「帰ってきたとき服が変わってたけど、どうしたの?」

「ん?風呂入ってきたからだけど。」

「・・・どこの?」

「地下にあったデカイ所。」

あそこは確か警護用のゴーレムがいて使用中は生徒以外は入れないはず。何故入れたのだろう?

「ああ、そうだ。忘れないうちに聞きたいんだけど、お前んとこの王様って使い魔いるか?」

「・・・・判らない。」

キキは突然あの男の事を聞いてきた。

「う～ん、タバサが知ってる範囲でいいから王様の事教えてくれ。」

キキが何故あの男の事を聞きたがるのか分からないが、私はキキにアイツの事を話し始めた。私がまだ子供だった頃、お父様ととても仲がよかった事、お爺様が亡くなった頃はまだ協力し合っていた事、少しずつお父様と仲たがいし始めた事、そしてお父様を手に掛けた事、お母様に毒を飲ませた事、私は無意識に感情を抑えて平坦な声で話していた。

「・・・・・なぁ、仲たがいし始めた頃、そいつの周りに見かけない奴等とか普段持ち歩かない物を持つようになったってのは覚えてないか？」

キキが私の話を聞いて当時の事に質問してきた。あの頃の伯父の取り巻き連中に見かけない顔、それに持ち物。

「・・・分からない。あの頃は城中が慌しかったから、でも妙な剣を腰に挿す様になった。」

「妙な剣？」

「詳しくは覚えてないけど、独特だったから印象はある。」

「・・・そうか。・・・・・・・・・あいつが召喚されたから可能性はあるな・・・・・。」

キキは返事をすると黙ってしまった。ブツブツと小声で何か言っているが聞き取れない。キキはしばらくすると、

「よし、寝よう。」

そう言って部屋の端に勝手に作った寝床に行き眠ってしまった。彼はたまに行動が唐突過ぎる。・・・夜も更けて来たので私も寝よう。本をベット横の棚に置き布団に入る。

**一日目、滞りなく終了いたしました。（後書き）**

どうでもいい補足情報
その1、ルイズの性格がとても丸いのはしょうがない。
その2、シルフィードは一度巣に戻ってから学院に住み着きます。

**朝です。朝は寝るものです。太陽とかマジうぜぇ。**

鬼奇Ｓｉｄｅ

チチチチと小鳥が喚く不愉快な朝。何故、太陽はこんなに眩しいのか・・・・あ〝ー溶ける。俺は日が当たらない様に布団を被り包まろうとして、
バサッ

「朝。」

タバサに剥ぎ取られた。起きたくない。

「起きる。」

「朝なんてこの世から無くなればいい。」

ゴンッ！
頭を杖で殴られた、痛い。

「起きる。」

「あ〝ー、分かったから杖を構えるな。」

俺はヨタヨタと寝床から起き上がり体を伸ばす、

「これ。」

タバサはそう言って俺に水とタオルが入った桶を渡してきた、

「あんがと。」

俺は受け取って顔を拭く。ついでに髪を濡らして整える。ってか

「・・・・・・すばらしきかな、ヒモ生活。」

「ヒモ？」

「いや、何でもない。」

タバサにはヒモの意味は分からないよな。うん、ヒモはやだなぁ。まぁ実際は使い魔だけど、そんなこんなで準備を整え部屋を出ると

「うるさい！キュルケのバーカ！！」

通路の奥の方からくぎゅボイスが聞こえてきた。朝から元気だねぇ、

「バカって何よ！ゼロのルイズのクセに！！」

俺はタバサを見るとタバサはテクテクと声のする方へ歩いていったので

「タバサー、厨房に行ってるからなー。」

俺はタバサにそう声を掛けてから厨房に向かった。さて、昨日の事を思い出しながら現状の情報整理だ。まず、このゼロ魔世界は原作世界ではなくクロス世界であるという事。主人公組以外でもイレギュラーが在る事。うん、整理するほど情報無かった。そんな益体の無い事を考えながら厨房の裏口に着く。中を覗くと忙しそうに皆さ

ん働いている。

「落ち着くまで待った方がいいかな？」

俺はとりあえず厨房が落ち着くまで扉の横に座りのんびりする。で、しばらくしたら向こうからメイドさんと仮面の騎士ってかリオンがやって来た。

「あら？こんな所でどうなさいました？」

メイドさんが聞いてきたので

「ああ、飯を食べに来たんだが忙しそうだったから落ち着くまで待ってる。」

俺は簡単に答える。

「そうなんですか。えっと確か昨夜、ミス・タバサが言ってた使い魔さんですよね？」

「おう」

「ならお話しは伺ってます。たぶんもう厨房も落ち着いたと思うんで、リオンさんと一緒にどうぞ」

そう言ってメイドさんが中に入っていく。俺と彼はそれに続いて厨房に入っていく、すると

「お！シエスタ、戻ってきたか！ん？後ろの２人はなんだ？」

まさに親方と言う呼び名がピッタシな人が現れた。

「マルトーさん。こちらの人達は例の使い魔さん達です。朝食を頼まれたので賄いをお願いしたいんですけど。」

「おお！そうか。お前さん達も大変だなぁ。貴族のガキ共に召喚されちゃあな。ちょっと待ってろすぐに用意してやる。シエスタ！」

「はい！」

2人はそう言って奥に行ってしまった。俺達はとりあえず近くのテーブルに着く。・・・・・奥のほうで鍋が煮える音、食材を切る音、洗い物をする音、俺達は互いに喋らず唯々静かに待っているだけ。そんな何でも無い、はたから見たらとても声を掛け難い状況で、

「マルトーさん！！ちょっ頼みが！」

奥の方から大きな声が聞こえてきた。その後は奥でなんやかんやがあって、そして奥から髪の長い黒髪の女の子・・・烏丸ちとせがやって来た。

「どうも、おはようございます。」

「おはよー。」

「ああ。」

挨拶をしてきたちとせに俺とリオンはそれぞれ挨拶を返す。

「えっと、お2人はもしかして私と同じで使い魔なんでしょうか？」

ちとせが席に座りながら話しをしてくる。

「おう、そうだ。」

「ああ。」

「まぁ！そううなんですか！よかったぁ～、人間の使い魔は私だけだと思ってたんですが仲間がいてよかったです。それじゃあ今日から私達？友達？ですよね！」

なんか友達を凄く強調してきたけど、

「あ、自己紹介が遅れました。私は烏丸ちとせ、と申します。気軽にちとせとお呼びください。」

「んー、俺は音深之珠鬼奇。鬼奇と呼んでくれ。」

「・・・リオン・マグマスだ、呼び方は好きにしろ。」

そんな感じで互いの自己紹介をし合っっていたら

「お待たせしました。おかわりはたくさん在るので欲しかったら言って下さいね。」

シエスタがそう言いながら朝食を持ってきてくれた。

「ありがとうございます。」

「すまない、いただく。」

「どうもありがと。」

ちとせ、リオン、俺の順にお礼を言っていく。その後は3人でワイワイと話しをしながらというよりちとせが1人で喋りまくって俺が相槌を打つ感じ。リオンは直接話をふられた時のみ話し返していた。で、それぞれ食事を終え、

「おちそうさまー。」

「おいしかったです。」

「とても美味かった。」

「はい、それはよかったです。」

俺達はシエスタやマルトーさん達にお礼を言い厨房を出る。

「お2人はこの後どうするんですか？」

食堂入り口付近に来た時にちとせが聞いてきたので

「俺はタバサについていく予定だけど。」

「僕も同じ様なものだ。」

俺とリオンは答える。そしたらちとせが

「それじゃあ私も付いていって良いですか？」

「まぁ、別に。」

「好きにしろ。」

付いてきたいと言ったので俺とリオンはテキトーに返す。

「ホントですか！よかったぁ～、私ジンさんに『お前は絶対に来るなよ』って言われてましたがお二人が誘った事にすれば万事解決ですね。一人で学園内を徘徊なんてそんな寂しい事やってられません。お二人には感謝します。」

う～ん、返答に困るような事を言うなぁ、リオンも厭きれた顔してるよ。今更だがこの面子にはツッコミが足りなさ過ぎだな。そんなこんなで時間が経ち食堂からタバサ達が出てきた。

ちとせSide

ああ！なんていい人達なんでしょう。あのエンジェル隊の人達と違って私を蔑ろにしないし、話しも聞いてくれる。私こんなに幸せでいいのでしょうか、いや・・・いいに決まってます！だっていままで私がどれだけ不幸だったかそれは・・（省略）・・・な訳ですし。ハッ！私ったらつい物思いに。さて私も皆さんの後に・・・・・・

「って、いない！？」

そんな・・・さっきまでそこにいたのに。また、私をハブるんですね。鬼奇さんにリオンさん・・・友達だと思っていたのは私だけだ

ったんですか。ああ、私っ・・・（省略）・・・ぐすんっ。

「くっ、こんな事で私はへこたれません。こうなったら自力で・・・ってあら？ポッケになにか？」

なんでしょう？ポッケから紙が出てきたので読みましょう。

「これは・・・鬼奇さん！私は信じていました。やはり持つべきは友ですね！こんなふうにメモを残してくれるなんて、えっと『先に教室にいきます。頑張って。』・・・教室の場所を書いてくださいよ！？」

信じた私がバカでした。所詮人間なんて信じれるのは自分のみと言う事です。仕方ありません。

「自力で探します。幸い私はこういうのは得意ですから。」

と言う事で私は皆さんが向かった教室に向かいます。ロストテクノロジーの探索で古い建物の遺跡に何度も行ってますし構造は似た様な物でしょう。楽勝楽勝。

「・・・・・・ここは何処でしょう？」

迷いました。おかしいですね？確かこちらに人の気配がしたと思ったんですが・・・・・あ！居ました。

「くっやっぱり魔法はダメか、ま、焦っても仕方ないね。じっくりやるさ。」

「あのすいません。」

私は大きな扉の前にいる女性に話しかけます。

「!?・・・な、誰!」

「あ、すいません。私烏丸ちとせと言います。」

「・・・こんな所で何を?」

「えーっと実はお恥ずかしながら少々迷ってしまいまして、それで教室の場所を教えてもらえないかと。」

「え?あ、あーそうなんですか。それでしたら私が案内してあげますよ。何処の教室ですか?」

なんて親切な御方なんでしょう、困っている私を助けてくれるなんて。えっと皆さんが行った教室は・・・・

「どこでしょう?」

「へ?あの、何処と私に聞かれても・・・、えっとその教室の生徒の名前はわかります?」

「あ、それなら分かります。ジンさんと言う方なんですけど。」

「ジンってもしかしてミスタ・アルベルトの事ですか?」

確かジンさんはそんな名前で呼ばれてましたね。

「はい。」

「その失礼ですがミスタ・アルベルトとはどういうご関係で？」

「えっと使い魔って事になってます。」

「使い魔？・・・ああ、では貴方がミスタが召喚したと言う。分かりました、今からご案内しますね。」

「ありがとうございます。」

これでやっと教室に行けます。ホントにこの人には感謝感激です。私は女性、ロングビルさんと言ってこの学園で秘書をやっている方に案内され教室に行きました。

「ここですよ。」

「本当にありがとうございました。このお礼はいつかしますね。」

「別にいいですよ。ではこれで。」

ロングビルさんに教室前まで案内してもらって私は彼女にお礼を言います。さて私は教室に入りますか。

ガラッ

「へ？」

「・・・・・・」

「・・・お。」

私が扉を開けようとしたら先に扉が開き中から鬼奇さんとちっちゃい女の子が出てきました。あれ？もしかして終わっちゃいました？私がオドオドしていると、

「ちとせ、こっち来い。」

鬼奇さんが少し離れた所から手招きしてきました。隣にはさっきのちっちゃい女の子が座って本を読んでいます。なんか見た目がミントさんに少々似てますね、小さくて髪が青いのとか。私は困惑しながら鬼奇さんの所までいったら、

ドゴォーン！！

教室が爆発しました。何が起こってるんですか！？

**朝です。朝は寝るものです。太陽とかマジうぜぇ。（後書き）**

どうでもいい補足情報
その1、鬼奇は朝が大嫌いです。朝日は敵です。
その2、鬼奇は相手から話しを振られないと基本的に会話が出来ません。

## 主人公が主人公っぽくない上に中身も無い

ロングビルＳｉｄｅ

「ふぅ、まったくヒヤヒヤしたよ。まぁあの子は迷ってただけみたいだしバレてないだろ。」

私はそう呟きながら学園長室に向かう。しかし宝物庫の扉はどうしたもんかねぇ、あのエロジジィに媚売って学園に侵入できたけどお宝を盗れないんじゃあ意味無いしさて。私は今後の算段を考えていたら学園長室に着いた。

「ふむ、まぁゆっくり調べるか。焦って正体がバレたら元も子もないからね。」

私は小声でそう言った後気持ちを切り替えて、

コンコン

「失礼します。」

「おお、ミス・ロングビル少し遅かったが用事はすんだかね？」

部屋に入るとエロジジィじゃなかった学園長のオールド・オスマンがそう聞いてきた。

「すいません。迷っていた使い魔の娘を案内していたら遅れてしまって。」

「使い魔とな？」

「はい、例の人間の使い魔でミスタ・アルベルトの召喚した娘です。」

私は仕事机に着きながら答える。

「おお、例の使い魔か。いやはや今年の使い魔召喚の儀は不思議じゃのぉ。ほっほっほ。」

ジジィはそう言って水ギセルを引き出しから取り出す。私はあまりあの煙の臭いが好きでは無いのでキセルをジジィから取り上げる。

「年寄りの楽しみを取り上げて、楽しいかね？ミス・・・・」

「オールド・オスマン。あなたの健康を管理するのも、わたくしの仕事なのですわ。」

私はもっともらしい理由をジジィに言う。

「こう平和な日々が続くとな、時間の過しかというものが、何より重要な問題になってくるのじゃよ。」

「オールド・オスマン」

「なんじゃ？ミス・・・」

「暇だからといって、わたくしのお尻を撫でるのはやめてください。」

このエロジジィが！酒場で合った時から人の尻を何度も触りやがっ

て。

「あ〜〜、う〜〜〜」

「（イラッ）都合が悪くなると、ボケた振りをするのもやめてください。」

私はとにかく声を抑えて冷たく言い放った。

「真実はどこにあるんじゃろうか？考えたことはあるかね？ミス・・・・」

「少なくとも、わたくしのスカートの中にはありませんので、机の下にネズミを忍ばせるのはやめてください。」

「モートソグニル」

ジジィが名前を呼ぶと私の机の下から白いネズミが出て行った。

「気を許せる友達はおまえだけじゃ。モートソグニル。」

このクソジジィ、使い魔のネズミに私の下着を毎度覗かせやがって。学園の宝を奪うまでの辛抱だと思っていたがこれ以上のセクハラしようものなら、

「オールド・オスマン。」

「なんじゃね？」

私はネズミから下着の色を聞いているジジィに

「今度やったら・・・・潰しますよ？」

「ひぃっ、そ、その程度の脅しでこのワシが屈するものかー！」

無駄に迫力出してんじゃないよ、ただのエロジジィのクセに。

「下着を覗かれたぐらいでカッカしよって！そんな風だから、婚期を逃がすのじゃ。はぁ～～、生き返るのぉ～～。」

うふ♪

ガコッ！ゲシッゲシッゲシッ！！

私は無言でエロジジィを蹴りまわした。特に下半身を集中的に

「あー！ごめん。やめて。痛い。もうしないから。だからそこはぁぁ！！」

ジジィが何か言ってるがそんな事は無視して私はとにかく踏み続けた。主に足の付け根辺りを。

「やめてー。い゛だっ！あんたそれでも人間か！？年寄りになんてことをぉぉぉ。」

ガチャッ！！

「オールド・オスマン！！」

「なんじゃね？」

私達は部屋に誰かが入ってきた瞬間にそれぞれ元の位置に戻り何も

無かった様に取り繕う。私はともかくジジィはなんであの状態から元に戻れるんだ？

「た、た、大変です！！」

いきなり部屋に入ってきたのは最近よく私に声を掛けてくるコルベールとか言う教師だ。まったくタイプじゃないし、いい迷惑なんだよね。ジジィと何かを話しているようだが一体何を？ブリミルがどうとか、少しするとジジィが

「ミス・ロングビル。席を外しなさい。」

真面目な、学園長としての真面目な声でそう言ってきた。私はそれに従い大人しく部屋を出て行く。下手に居座ろうとして怪しまれたら面倒だからね。私は部屋から出るとやる事もないので宝物庫の調査をしに行く事にした。

リオンＳｉｄｅ

「ふう、これでいいだろ。」

僕は手に持った雑巾を置き皆に言う。

「そうですね、これだけ綺麗になればいいですね。」

そう返してきたのはちとせだ。今この教室には他にもルイズ、キキ、ジン、タバサ、の６人の人間がいる。

「そうだな、存外早く終わったな。」

ジンがそう言いながら魔法で掃除道具を仕舞っていく。

「まあ、5人がかりでやれば早いよな。」

キキがそう言う。教室には6人いるがタバサは端で本を読んでいただけで掃除には参加していない。

「すまない、助かった。僕とルイズだけだったら昼まで掛かっていた。」

僕は皆に礼を言うが何故かルイズは端っこで俯いたまま何も言わない。

「おい、ルイズ。お前も礼ぐらいしないか。」

僕はルイズにそう言って近づく。すると

「別に・・・手伝ってなんて・・・言ってない。」

ルイズはふて腐れた様にそう呟いた。まったくコイツは・・・

「お前はバカか。頼んでも無いのに手伝ってくれたんだ、礼ぐらい当然だろ。」

僕はルイズの身勝手な発言にをたしなめる。しかしルイズは

「っ！バカってなによ！！私は手伝って欲しくなんか全然無かった

し、それにどうせ皆心のなかでは迷惑がってるんでしょ！！恩着せがましいのよ！」

急に怒り始めて周りの者達に八つ当たりし始める。さすがにこの発言は看過できない。

「おいルイズ、今の発言は失礼だ。お前は・・・・」

「まあまあ、別に僕達は気にしてないからさ。」

僕がルイズを叱ろうとしたらジンが横から声を入れてきた。

「ルイズも別に迷惑なんて思ってないよ。友達が困ってたら手伝うのが当たり前だよ。」

「そうですよ、ジンさんの言うとおりです。友達は助け合うもの、助け合いに友達、なんていい言葉でしょう。」

ジンとちとせはルイズを元気付けようと声を掛ける。

「・・・・・・っ、」

しかしルイズはそっぽを向き更には

タッ！

教室を飛び出して行ってしまった。まったく世話の焼けるヤツだ。

「あ、ルイズさん！あの、追っかけなくていいんですか！？」

ちとせが僕にそう言って来たが、ハッキリ言ってあの手合いは追いかけてもコチラの話しを聞かないどころかさらに不機嫌になってし

まう。しばらくほっといて落ち着くのを待つのが無難だ。

「別にかまわん。一人にして少し頭を冷やしたほうがいい。」

僕はそう言った。しかし、ちとせにはそれが気に入らないらしく。

「なんでそんな酷い事言うんですか！ルイズさんは傷ついているんですよ。リオンさんが追っかけて優しい言葉を掛けて上げなくてどうするんですか！？いいですか、女の子と言うのは・・・・・」

ちとせがクドクドと話し始めてしまった。こいつは話し始めると周りが見えなくなるからほっとけばいい。僕は改めて皆に礼を言おうとしたがキキとタバサはいつの間にか居なくなっており、ジンはちとせに魔法を掛けて眠らしていたので僕はジンに一言声を掛け教室を出た。

ルイズＳｉｄｅ

なんなのよ！私だって皆が親切にしてくれてる事ぐらい分かってるわよ！・・・・・・ううぅ～、あーもう！！

「大体リオンはもう少し私に優しくするべきよ！いつもいつも何かあるとバカバカって、私はリオンの御所人様なのよ！」

さっきまで憂鬱だった気持ちがリオンへの不満でイライラに変わってきた。しかもこうゆう時に限って

「あら？ルーイーズ。こんな所ほっつき歩いてどうしたの。貴方が爆破した教室の掃除はもう終わったの？あ、もしかしてリオン一人に押し付けて来たんじゃないんでしょうね？ソレはさすがにかわいそうじゃない？」

出やがった。この無駄乳女、キュルケ。チッ、たれてしまえ！

「あんたには関係ないじゃない！」

「そんな事言わなくてもいいじゃない。彼とってもカッコイイしい男じゃない。」

また、なんか言い始めた。どうせいつもの盛り内容だろ、気分も冷めちゃったから相手する気にもならない。私はキュルケを無視して歩いていこうとすると

「ちょ、何処行くのよ。ねぇ待ちなさいって。」

「あーもう、なんなのよあんた？」

「ルイズこそどうしたのよ？いつもだったらキーキー言い返してくるのに。何？ホントにリオンと喧嘩したの？」

「違うわよ！もうほっといてよ、私今すっっっごく落ち込んでんだから。」

「え！？ちょ！ルイズ！！待ちなさい！」

私は一人にして欲しいだけなのにキュルケは突然人の額に手を当てて

「・・・・・・熱は無いわよね。頭も・・・ぶつけた様な痕はない。ルイズ、とりあえず医務室にいきましょ？」

とても心配そうな顔で言ってきた。

「って、私が落ち込んでちゃあ悪いかー！！」

「あら、元気じゃない。落ち込んでるって言うから心配したのに・・・・頭の。」

「なに！？頭のって！私は何ともないわよ！いいから一人にしてよ、もう。」

「なによー、いいじゃない。そうだ、外で一緒にお茶しましょ。」

私の話しを聞かないキュルケは一人で勝手に話しを進めて私を無理矢理外に連れ出した。はぁ、まったく。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1815w/

---

青いチビの使い魔

2011年10月22日02時21分発行